

本多弘之

honda hiroyuki

# 宗教心と根本言

7



見てきた。

「根本言」たる「南無阿弥陀仏」を通して、存在にたまわる真実の解放を一切衆生に具現する道筋を、親鸞は明らかにしようとする。しかも、個人の努力や能力に依る道ではなく、普遍的な救済を念じてやまない本願の表現（回向）によってこれを具体化しようとする。そのことについて考察しているのが、先回までに展開した回向の論理による仏道成就の道筋であった。その道理に出遇いながらも、その論理的な救済には落ちこぼれるような、親鸞自身の悲痛な慚愧が表されていることを想界に大きな影響を与えた。

ここで少し問題を現代の課題に引きつけながら考察し直してみよう。言葉の性質について、大きく二種類の「根源語」（Grundwort）があるという智見を発表したのは、マルティン・ブーバー（Martin Buber）であつた。彼はその著書“Ich und Du”（我と汝）において、“Ich und Du”と“Ich und Es”（「我とそれ」）という語で、言葉には根底に二種類の性質があることを示して、二十世紀の思

このブーバーの思想の背景には、全世界を巻き込む戦争（第一次世界大戦）が引き起こしたあまたの悲劇があり、その根底に戦争が一般市民をも戦火の犠牲にしてしまう質を孕んでいるということがあったのではないか。そして、その本質が戦時ののみならず、実は日常的な近代社会の生活全般にも染み通つていることを、言葉の性質を示すことによつて明らかにしようとしたのではなかつたかと思う。

最近の日本の思想情況においても、圧倒的な経済優先の方向があることから、合理的・

経済的・効率的な言葉のもつ優位性が、人間の喜びや悲しみなどの感情とはほとんど無関係に、大手を振ってあたかもブルドーザーが道路を平らにしていくように、国民の生活全体を押ししつぶしていっているのである。

ブーバーの“*Ich und Du*”が和訳されたとき、訳者が書名を『孤独と愛』と名づけていた。この書名に取り上げられた「孤独」とは、おそらく二種類の語のなかの「我とそれ」が与える生活のもたらす結果が、個人の生活空間を「孤独」にする必然性をもつていてことを示しているのであろう。それに対し「愛」とは、「我と汝」という関係によって与えられてくる神との関係や人間同士の関係の暖かい関係を象徴的に表しているのであろう。

そもそもこのブーバーの要素の根底には、生きるということは出遇う関係を生きることであり、その出遇いをいかに受けとめるかと、いうところに、生活に二重の意味が生じてくことを見出そうとしているのではないか。近代生活において、人間の生活に重大な危機的不安感が覆つていていることを、思想的に解明しようとする試みだったのであろうと思う。

これは仏教で言うなら、「因縁」としていただいている存在の在り方を、どのように見るかということであろう。仏教は人間存在の在り方を「一切皆苦」として認識する。そしてその苦悩の事実は、「諸行無常」というこ

とを知るからであり、そこに「我執」（自己自身への深い愛着）という問題が絡んでいることを認知せよと教えるのである。この智見からするなら、「愛」という語には、存在の深層に存する「自己執着」とそれから生ずる「貪着」すなわち所有欲という課題があることを知らされるのである。それによって、存在の出遇いには、「無明」と示される無自觉的な問題が普遍的に広がっていることを気づかされるのである。

そのことを判然とさせながら、ブーバーによつて提示された現代社会の根本課題を考察

してみるとどうなるであろうか。まず、*“Ich und Es”* という関係表記を、仏教の基本概念に置き換えてみよう。五蘊で言うなら、「色」として因縁を見るということではなくだろうか。これを物象化とか記号化と言い換えてよいのかもしれない。生きて血が通う形で出遇いを受容するのではなく、冷たい対象化された物として、自己の外側を通り過ぎていく「もの」や「こと」として事象を見る立場を、この “*Ich und Es*” という関係概念が示しているのであろう。

こういう見方の根底に、「自我愛」があるということを仏陀は示されたのである。しかし事柄は、実はより深層から見直す必要があるかもしれない。大乗仏教では、我執と法執ということが言われている。法執とはどうい

うことかがわかりづらいのであるが、この概念が見出されてきた過程には、求道心が自己的煩惱を断絶するべく悪戦苦闘してきたといふことがあった。ほぼ煩惱の根を断ち切ったという存在（阿羅漢）が、実際には他に対する関心を失つてしまふという事態に、求道心そのものの根本問題の見直しが起つて、我執より深いところに見出されてきたのが法執だだと言われている。法執は「法我執」とも言われることがある。これは存在を「実体化」する意識作用ではないかと言われたのが、安田理深であった。

我執が、自己への愛着と自己の関係する周囲のものごと（例えば家庭や会社や国土など）への愛着（これを我所執という）の総体だとするなら、法執とは我執の背後にあって、そういう存在物をそれぞれものごととして実体化する作用なのだということであろうか。すなわち菩提心が、我執を支える実体化作用を見出したのだということではないか。それによつて、単に自我への愛着を断つではなく、その根底にある実体化作用を浄化するなら、自由に自他の苦悩からの開放を平等の視座で実践できるということだったのであろう。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）  
(続)